

クリちゃん動物園散歩(四)

根本進



イタリア人には、いたずら好きが多い事は、他の場所でもみました。

やはりローマのボルゲゼ公園の動物園で、違う日に行った時の事でしたが、二人の若者が低い外柵を乗り越えてチーターの檻に近づいていました。見ると昼寝をしているチーターの片足が檻の縁まで伸びていて、二人はその足の裏を指先でつついているのです。もし猛獣が怒って急に向きをかえたら……とこちらはハラハラしました。

というのは、私にはこんな経験があります。名古屋の東山動物園で猫科の動物舎を見ていたら、親切な飼育係が展示の

裏側の動物の寢室を見せてくれる事になったのですが、その通路が暗くて狭い上に、「この連中は待ち構え方の動物で案外に手が早いですから気をつけて下さいよ……」と言ったか言い終らぬ中にくすぐ前の檻の下からサッとスゴイ爪を出した前肢が私の靴の近くに躍り出てきました。これには本当にびっくり、一瞬、お尻の穴が縮むほど胆を冷しました。以来私は、猫族がコワイのです。

よく見るとこの二人は、そんな事も心得た常習犯なのかも知れません。いざという時に逃げ出すか、とびすさる用意の足構えとでもいう逃げ腰で、そんな危いことを楽しんでい

様子です。

それを見ている他の客も、それに注意をするでもなく、形勢如何とニヤニヤしながら、困睡かたずをのんでみているのでした。……こう書く私も、先を急ぐ旅行者とは言え、ふりかえりふりかえりこれを見ていたわけですから、立派な事は言えませんが。

この動物園には記念写真をすすめる写真屋がいて、看板商品とでも言うか、動物園から借りたのか、ライオンの赤ん坊を椅子にのせていて、お客がこれを抱いたところを一緒にスナップしようと誘っていました。サーカスのテント前ならいざ知らず、こんな風景も、他の国の動物園内では見た事のない情景でした。

ミラノにも公園の中に動物園があります。その動物園の入口は小さく可愛らしくて、お伽の国の遊園地のような感じでした。園内には、老樹が木蔭を作っている処に泉の湧く池があったり、市民が昼休みに憩いの場として利用するのにとてもびったり、いい感じですよ。

このすぐ横に象舎があって、人が集まるとインド象が二頭、芸を披露していました。

まず飼育係が象の大きな顔につり合う、大きな眼鏡をかけ

させます。かけてみると、象の眼の方は不つり合いに小さいのでおかしく、お客は大笑いです。その後で鼻でラッパを吹いたり、太鼓をたたいたり……まるで見せ物小屋のようなサービス振りで喝采を浴びていました。

もっと私を驚かしたのはカバの所で、飼育係がカバの口元を軽くだたくと、カバは大きな口をアングリと開けます。その時、飼育係は喜ぶお客達に手をさし出して、チップをもらっていました。

私がナボリの国立美術館で他の客よりいささか熱心に彫刻を見て廻っていたら、それと知った監視員が近づいてきて眼で合図をして誘うのです。つまり今はここに展示されていないが、もっといい彫刻が別室にあるのを見ないかという事で、以前に一度はその誘いに乗りましたが、今日は二度目なので断りました。すると私が一息入れにベランダへ出た時に、内側からカギをかけて、「お前は俺にチップを呉れないと、出さないぞ」という仕草でニヤニヤ顔で私をおどかすのです。もし私が本気で怒り出せば、とりすました顔でドアを開きますが、ともかく、そんな茶目っ気のあるズルさといわずら好きな国民性だと思いました。

お客へのサービスという話が出たついでに、動物園側としてどんな事をしているかについて気がついた事を書いてみましょう。

案内一般にまだ知らない方も多いと思うので、まず日本は、東京の上野・多摩の場合を例にして述べると、この二つはどちらも東京都の動物園ですが、園内の売店などは東京動物園協会が経営しています。協会は動物園関係事業を後援して、写真その他の資料を集めたり、毎月印刷物を発行したり、動物愛好会、昆虫愛好会の催しをやっていきます。

はじめは何も知らない通りがかりの客として、この愛好会をのぞいた私でしたが、面白く、教わる事がとても多くて、努めてこの会へ出る様になりました。ここでは園長や、飼育課長をはじめ飼育係員の皆さんが、私たちが今まで知らなかった動物の話や、飼育の苦労話を聞かせてくれるのです。園外から鳥や、動物や、昆虫の専門の学者さんが、講演に来ることもたびたびでした。

夏には夜の動物園見学会というのがあって、動物はどんな寝姿をしているか見ることが出来ました。ライオンは大の字

になり寝そべっているし、キリンや象はなかなか横にならないのです。飼育係員の話では、草食動物は大体敏感でいくらそーっと近づこうとしても、こちらが近づく前に向うの方が先に気づいてしまつて、のんびりした寝姿というものはなかなか見られないという事でした。

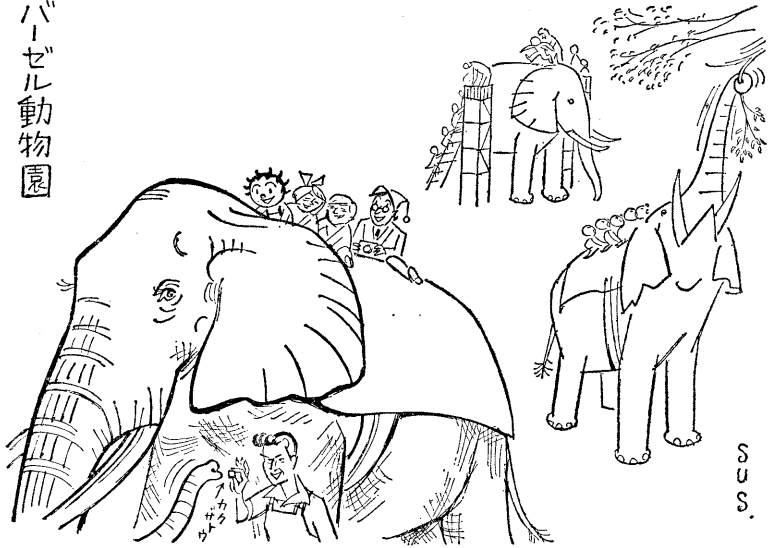
「あれ以来、夜中に便所に起きたりすると、今頃動物園の象はやっぱり立っただまま寝てるのかなと思つたりする様になりました」という人がいましたが、私も同じで、時々、真夜中の動物園をふと考えることがあります。

外国の動物園では、ゾー・フレンズ・デー (Zoo Friends Day) というのがあって、この日はいろいろな動物のショーをやつたり、ペット動物の飼育相談をやつたりしてお客にサービスをする聞きまます。日本でも最近それを真似た催しをする所が増えているようです。

動物の絵や、赤ちゃんの名前の募集や、大きく育つた動物の計量を当てさせ、この日に当選者を発表したり、動物園も土地柄によつていろいろ新しい企画をしているようです。

これはそんな特別な催しではなかったのですが、スイスのバーゼル動物園では十年前までアフリカ象にお客を乗せていました。私はここへ数度行った事がありますが、その象たち

バーゼル動物園



S U S .

が面白くて長時間みている中に、象の飼育係員と仲よしになりました。明日お前も乗せてやるから、みんなと一緒に並べようというので、翌日も一度行きました。日曜日で大変な人出で、象に乗りたい人の行列は百メートル位続いていました。象に並んでいるのは子どもばかり。恥しいけれど我慢して三十分並んで順番を待ちました。

乗る所は、スベリ台の様な梯子を十段位登ると象の背と同じ高さの台になっていて、そこで青年が世話して乗せてくれます。三人の子どもたちといっしょに象の背にまたがって、大きく左右に揺れながら、ゆらゆらといい気持。鳥類が放し飼いになっている広い芝生のまわりを一周した頃には、股がさけそうで痛くて……、でもこんなことは多分一生に一度の事だから我慢しようと思ったものです。

後でタイの象を飼っている農村へ行って、本格的に象に乗せてもらった時にわかった事です。象は首に乗ると両足も開かずすみまみすし、揺れずに楽です。そして象の操縦は、両足先を象の両耳の後にあてて、ここだけは柔い象の皮膚をゴシゴシとこすって右、左に歩かせるのです。

(漫画家)